

シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金成果報告書

課題：維持可能な社会のために

—ポスト開発・脱成長論によるサステナビリティ概念の脱構築

責任者：山本純一（環境情報学部教授）

申請者：笠井賢紀（政メ後期博士課程）

2010年10月12日

1. シンポジウム概要

演題：倫理学としてみたセルジュ・ラトゥーシュのポスト開発思想の可能性

講演：中野佳裕氏（立命館大学客員研究員）

討論：北野収氏（獨協大学教授）

開会挨拶：山本純一（慶應義塾大学教授）

閉会挨拶：田島英一（慶應義塾大学教授）

司会：笠井賢紀（慶應義塾大学大学院後期博士課程）

日時：2010年10月5日（火）16:30-18:30 SFC 大学院棟 τ 館 12 教室

形式：学内外公開／参加費無料／事前登録不要

広報：SFC 立看板／SFC CLIP／Twitter／SFC 授業内告知

講演概要：

今年7月、フランスの経済哲学者セルジュ・ラトゥーシュの初の邦訳書『経済成長なき社会発展は可能か？』（作品社）が刊行され、これまで日本に紹介されることのなかった希代の思想家の四十年以上にわたる研究・思索活動の一端を日本語で知ることができるようになった。

ラトゥーシュの思想の対象領域は、西洋近代の経済思想の批判からはじまり、今日の消費社会がもたらす地球規模での不正義を是正するためのオルタナティブな社会の建設のための実践運動の提案にいたるまで幅広い。本講演では、日本の世論では比較的見落とされる可能性がある、思想家としてラトゥーシュの著作の可能性を大局的に議論したい。一方ではフッサール以降の現象学における西洋近代批判の思想運動と、他方では社会主義思想の再解釈の潮流と関連づけながら、ラトゥーシュのポスト開発思想がヨーロッパの社会思想（特に社会倫理、正義論）に与える貢献について説明する。

2. 振り返り

会場には 20 名を超える一般来場者が参加した。SFC CLIP や Twitter を見た学外からの学生参加も目立ち、ポスト開発思想の注目度を物語るものだった。中野佳裕氏は、ポスト開発思想の先端であるラトウーシュの思想をいち早く日本に紹介した第一人者であり、同訳書は出版から 3 ヶ月で 6 刷を重ねている。

本シンポジウムでは「ラトウーシュの代わり」としての講演ではなく、あくまで、自身が研究者である中野氏に、日本におけるラトウーシュの受容に関する講演を行ってもらった。討論はグスタボ・エステバなど中南米のポスト開発思想に明るい北野収氏に依頼することで論が深まることを狙った。一方で、とかく難解になりがちな思想の議論に初学者でも参加できるよう、講演者・討論者ともに「学部生へのメッセージ」を投げかけてもらった。

特に中野氏の「幸福や人生と真っ正面から向き合う学問を！」というメッセージはインパクトがあるものだった。会場からは活発な質問や意見が出た。たとえば「ポスト開発思想は現在の開発を批判して結局、前近代に戻るだけではないのか」とか「自分はどちらかという『社会不適合者』だと思うが、こういう学生は、実際には何ができるだろうか」などといった突っ込んだ質問である。

中野・北野両氏には湘南藤沢学会会員とできるだけ交流を持てるように、開場前の 4 限から SFC に来ていただき、山本純一研究会で学部生との密な交流を行った。また、シンポジウム後の懇親会には参加者の 8 割以上が参加し、交流が深まった。

本シンポジウムは湘南藤沢学会の基金が無くては開催できなかった。最先端の議論に会員を中心として学内外から熱心な学生が参加し、基金の使途として適切なものになったと思われる。

学会には深く感謝しています。ありがとうございます。

